



『相手を尊重するということ』



栃木県
河内剣道クラブ
中学1年 石渡 伝

僕はこの六月、剣道初段の昇段審査を受けるため、剣道の理念や修練の心構えなどについて学びました。その中で「常に相手を尊重する心を忘れない」の一文が目にとまりました。剣道では特に大切にしていることのように感じました。しかし「相手を尊重する」とはどういうことかよく分からなかったので、父に聞いてみました。竹刀で打つことで勝敗を決める剣道では、打たれた時、ついカッと感情的になったり、過度な闘争心も出たりする。そういう気持ちを抑え、互いに身体を鍛え、技を高め合う「協力者」として、向き合った相手を心から尊敬と感謝の気持ちをもって、良き剣道を目指そうとすることではないか。と教えてくれました。

父の話聞いて、そのような気持ちで稽古や試合に臨んだことがあったらどうか自問自答してみました。稽古中は「勝つためにやってるんだ。がんばるぞ。」と自分に気合を入れ、試合中は「勝つのは自分だ！」と相手に敵意をむき出しにして、ただ「勝つ」ことだけにこだわってきたように感じました。勝利を目指す中で、相手を尊重する心や態度で試合に臨むことは、とても難しいことだと思いました。

そのようなことを考えているとき、学校から作文の課題が出されました。テーマは「心のバリアフリー」障がい者や高齢者が生活しやすいように困難を取り除くことを指しています。このテーマを前に、僕は今までの経験や体験を思い出していました。ごく普通に生活している自分にとっては縁が遠く、仮に病気やけがをして不便な思いをしたことがあれば、身の回りのバリアに気付くのだろうが…となかなか鉛筆が動きませんでした。

そんな時ふと、昨年出場した、ある剣道大会での出来事を思い出しました。試合を見学中、隣のコートが急に騒々しくなりました。見ると、開始線に立っている選手が、左手だけで竹刀を持ち、構えていました。観衆が注目する中、試合が始まりました。右手が動かないようでした。それでも一本一本に気合を込めて打ち込む姿に、僕の目と心はくぎづけになりました。はじめ戸惑っていた対戦相手がメーンと打ち返した拍子に、左手だけでバランスをとっているためか、ひっくり返るように倒れてしまいました。周りで見っていた観衆も、僕も、アッと声をあげました。審判の先生も心配そうにかけ寄りました。が、自力で立ち上がり、最後まで試合を続け、堂々と礼をして試合を終えました。

近くで見ていた誰かが「あの子とやったら勝てると思うけど、なんか悪いよね。」「そうだね、こっちは両手だもん。勝って当たり前だよ。」と小さな声で話しているのが聞こえてきました。決して口に出すことのできない自分の心の中を言われたみたいで、ズキンとしました。稽古でも試合でも、一本が決まること、そして勝つことは嬉しく、大きな喜びです。しかし、相手が彼のように片手で竹刀を振る選手だったら？嬉しい一本に違いないはずなのに、手放して喜ぶことができない複雑な気持ちになるのではないかと。



これが「心のバリア」なのだ。僕は気付きました。それは障がない自分を基準にするから、片手で竹刀を振る彼を不利だ、気の毒だ、かわいそうだと僕の心が決めつけているのです。自ら相手にバリア、すなわち壁をつくっているのです。片手であれ両手であれ、皆、同じように日々稽古に励み、試合に臨んでいるはずです。半端な気持ちで相手に向き合うのは、人格を傷つけることとなります。父の言った「どんな相手とでも剣道を通し、常に真剣に互いの心・技・体を高め合う」それこそが相手を尊重する心につながるのだとこの体験から胸に刻みました。これからの僕は心の壁を取り去り、どんな相手とも真剣に、全力で向き合う。そんな剣道を目指します。